

伝えたい日本の支援～梅林なるほど ザ・ワールドなう～

実践場所	神奈川県	横浜市立梅林小学校	実践者	山口 祥子
対象	小学5年生		時間数	15時間
担当教科	小学5年生担当		実践教科	総合的な学習の時間・社会・国語・道徳
ねらい	<p>・自分たちの生活は様々な国との関わりの中で成り立っていることを理解し、世界への興味関心を高める。・タンザニアの生活や文化を通して、他国に対する偏見や固定観念に気づき、異文化を理解しようとする心情を育てる。・開発や日本の支援の現状から日本らしさを考え、日本の良さを継承していこうという意欲や自分にできる支援をしていこうとする心情を育む。</p>			
実践内容	回	プログラム		備考
	1～3	【わたしたちの食生活のこれから（社会科）】 ・食糧自給率、食品ロス量など我が国の食糧事情の課題を知り世界へ目を向ける必要感をもつ。		小学校社会科「社会5」（光村図書出版）
	4～7	【グラフや表を引用して書こう(国語)】 ・これからの食生活に関し自分が関心をもったテーマについて資料を用いた作文を書く。		小学校国語科「国語五銀河」(光村図書出版)
	8	【梅林なるほどザ・ワールドなう(総合)① 僕たちの知っている国々】 ・地球儀と世界地図を見ながら、自分たちが知っている国や都市の情報を共有し、位置を確かめる。 ・「世界がもし100人の村だったら」を抜粋して提示し、世界の現状を様々な視点で捉える。		
	9	【②僕たちの知らない国 アフリカ タンザニアってどんなところ?】 ・日本で研修をしているムボンデさんの写真を見せ、フォトランゲージをする。 ・アフリカの国タンザニアの存在を知らせ、タンザニアについて自由にイメージをする。		
	10	【③僕たちの知らない国アフリカ タンザニアってきっとこんな所】 ・タンザニアについてグループで〇×クイズを行い、タンザニアについてイメージを膨らませる。		
	11	【(道徳)国際理解「この空の下で」】 ・国際社会に生きる一員である日本人としての自覚を深め、世界の平和と人類の幸せに寄与しようとする心情を培う。		・小学どうとく「心つないで5」(教育出版)
	12	【④アフリカ タンザニアって行って見たらこんな所だった!】 ・タンザニア研修の写真を見ながら〇×クイズの答えを知り、自分たちの先入観や偏見に気付く。(パワーポイント)		
	13	【⑤日本の支援を考えよう】 ・無人島ゲームを行い生活には無くてはならない物やあるとよい物があることを理解する。		・ハンガーマップ(国連WFP)
	14	【(道徳)国際理解「5年1組のみなさんへ」】 ・タンザニア支援のため現地で活躍する人たちの存在を知ること、国際協力の実際を感じ、自分も日本人として協力していこうとする心情を育てる。		
15	【⑥日本らしい支援 自分らしい支援～伝えていきたい日本のよさ～】 ・学習全体をふり返り、自分が何を知り、考えたか、これからどうしていきたいかまとめる。			
成果	子ども達が学びの中で、自分たちの生活が外国との関わりの中でこそ成り立っていることに気づき、外国へ関心をもち、視野を広げられた事は成果の一つである。また国際社会の一員としての日本人の活躍を知り、日本の良さを感じ、自分事として支援を考えられたことは良かった。			
課題	開発教育を根付かせ充実させるためには、子どもの発達段階に見合った開発教育を教育課程の中にきちんと位置づけ系統立てて行う必要性を強く感じる。子どもの発達段階にそぐわず、興味関心が低い所では教育の効果は半減してしまう。現在の国際理解教育に開発教育のエッセンスを組み込むべきである。			
備考	教師の独りよがりや唐突な学習でない、子ども達の思考の流れに沿った学習を展開するよう心がけた。タンザニア研修から学んだことは多くそれは自分の財産であるが、今回その中の小学生の実態に合致した何を切り取って児童に提示するか、その取舍選択に苦慮した。今回は自分が一番感じ伝わったことを軸に実践したが、児童の実態にあっていたか疑問も残る。来年度からは開発教育の効果を上げられるよう十分に実態を鑑み、研修のどの部分を切り取って伝え、考えさせるか熟考し、継続して実践したい。			

[授業実践の詳細]

1-3

時限目「わたしたちの食生活のこれから(社会科)」

1 子どもの学習の流れ

- ①食料自給率の変化・食料の輸入先・食品別食品使用量・食品別食品ロス量等のグラフを読み取る。
- ② 資料をもとに、年間の一人あたりの、また日本全体の食品ロスを計算する。
- ③ 計算結果をもとに、現在の食生活について問題意識をもち、これからの食生活のあり方について考える。
- ④世界の食糧不足、将来の食料供給の見通し、食品の安全性などの視点からこれからの食生活のあり方や食料生産について話し合う。
- ⑤地産地消、フードマイレージという考え方からこれからの食生活のあり方について考える、

この時限のねらい

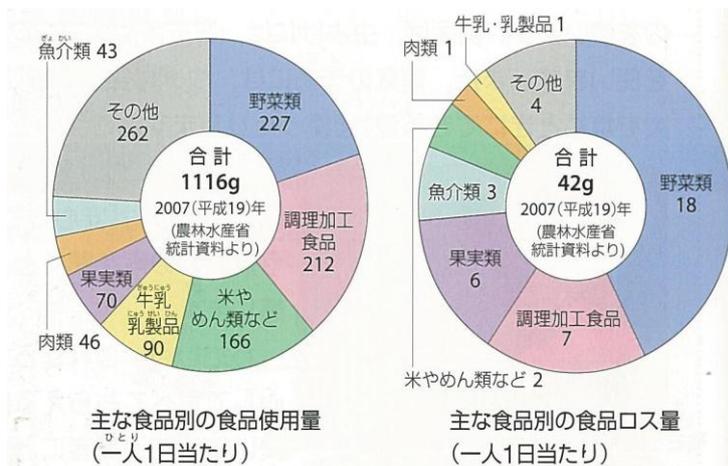
資料をもとに、世界の食料不足の現状、将来の食糧供給の見通し、不足、食品の安全性などの視点から自分たちの食生活について考え、これからの食生活のあり方について自分なりの考えを持つ。

2 子どもの学習の成果・反応

- ◇私たちが口にしている食料の約60パーセントは輸入しているのに、年間196万トンもの食べられる食品を廃棄している実態を知り、驚いていた。一人ひとりが食べ物を大切にし、のこさず食べるのがまずは大切だと感じていた。
- ◇多大な食品ロスをしている日本に対し、世界には多くの栄養不足の人がいる現実があること、食糧自給率から考えられる食糧供給・食料生産の問題、輸入食料の安全性などから、外国へ目を向ける事の大切さや、自給率を上げる取組をしていかななくてはならないという意見が数多く出された。
- ◇様々な視点の中で、これからの食生活のあり方について自分が一番気になった視点を取り上げ、意見文を書いて、友達と考えを交流することにした。

3 使用した教材

<教材1>食品使用量及び食品ロス量のグラフ



<教材2>食糧自給率の変化のグラフ(略) <教材3>世界の栄養不足人エグラフ(略)

1 子どもの学習の流れ

- ①「グラフや表を引用して、これからの食生活のあり方についての意見文を書く」という学習課題を設定する。
- ② 教科書の例文より、自分の意見を述べるためどのように、どのような資料を引用すればよいかを理解する。
- ③ 自分の考えの裏付けとなるグラフや表を選び、「これからの食生活」についての意見文を書く。
- ④書いた文書を読み合い、友達の考えや文章の書き方、表やグラフの使い方について意見や感想を交流する。

この時限のねらい

目的や意図に応じて収集した事柄を、全体を見通して整理するとともに、引用したり図表やグラフを用いたりするなど書き方を工夫して、自分の考えが伝わるように書く。

2 子どもの学習の成果・反応

◇児童の書いた意見文には世界の栄養不足の人々や自給率と輸入に視点をあて「色々な国に栄養不足で困っている人がいるのに、ロス量が多いのは食生活を見直す必要がある」「食べ物に対して感謝したり、好き嫌いを無くしたりすることが必要だと思います。」「今の日本の食品ロスを見直していかなければいけないと思います。なぜなら栄養不足に苦しんでいる人が大勢いるからです。その人達のことを考えるとでも申し訳ない気持ちになります。」「このまま食品ロス量が増えていしまうと、せっかく作られた野菜などがどんどん無くなっていき、野菜まで輸入に頼ってしまうのではないかと思います。わたしにとっての第一歩は自分に出された量は必ず食べるということです。」等、食糧問題を世界との関わりの中で自分事として考えているものも多く見られた。また、輸入される食品の安全性について意見を述べる児童もおり、将来の食生活を考えることをきっかけに、外国との関わりを身近に感じ視野を広げられた学習となった。

8 時限目「梅林なるほどザ・ワールドなう～僕たちの知っている国々」(略)

9-10 時限目「梅林なるほどザ・ワールドなう～僕たちの知らないアフリカ タンザニアって」

1 子どもの活動の流れ

- ①タンザニアのムボンデさんとjica横浜で一緒に撮った写真を見て、色々なことを想像する。(フォトランゲージ)
- ②写っている外国人がタンザニア人であることを伝え、地球儀や地図でその位置を確かめると共に、ムボンデさんが横浜に来た理由を想像する。また、タンザニアについて自由にイメージをする。
- ③グループでタンザニアについての〇×クイズを行い、タンザニアについてのイメージを膨らませる。

この時限のねらい

一枚の写真から、写っている外国人について自由に想像したり、タンザニアについて〇×ゲームをしたりイメージをもつことを通し、タンザニアに親しみをもつ。

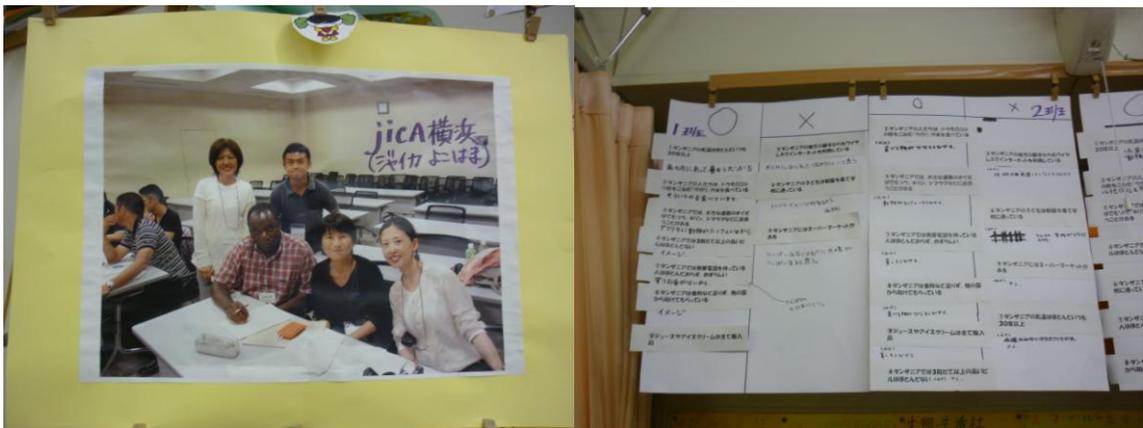
2 子どもの活動の成果・反応

◇写真を見て「外国人がいる」という反応がまずあり、なぜそれが分かるかと問うと「肌が黒い。黒人だから分かる」「日本人と肌の色が違うから」という回答だった。写真はどこで撮ったのか、いつ撮ったのか、一緒にいる人はだれなのか、この外国人はどここの国の人なのかなど様々な視点でイメージを膨らませた。

話の中で、タンザニアを紹介し、地図でその位置を確認し、横浜に来た理由も色々想像した。

その後、一人ひとりにアフリカ タンザニアについてのイメージをださせると、どの子もなかなか応えられない様子が見られた。子どもたちの意識や生活の中にアフリカはほとんど存在せず、イメージすらできないのだ。そんな状態でのタンザニアのイメージは「1年中暑そう」「自然が多い」「砂漠がありそう」「黒人」「家はにぎやか」「食料があまりない」「～族とかわかれていそう」「バナナがいっぱいになっていそう」「動物がいっぱい」「平和」「平和でない」「世界遺産がある」「大金持ちがいる」「手で食べる」「高山地帯」「マラソンが速い」「レアなカブトムシがいる」「病気にかかりそう」などであった。

◇グループ活動での〇×ゲームはどの子も一見楽しそうに活動に取り組んでいた。しかし、世界に関する興味もまだまだの子どもたちで、ましてやこの時点でのアフリカに関する興味や関心はとても低く、想像することの土台すらないという様子の児童も少なくなかった。やはり外国に関するある程度の知識があつてこそ意外性を楽しむ〇×クイズは楽しめる物で、〇×クイズがこの子達5年生の実態に合っているのか考えさせられた。しかし逆に言うとそんな実態だからこそ、視野を広げるきっかけとしてこういう活動があっても良いのかもしれない。



11 時限目「この空の下で(国際理解)道徳」

1 子どもの学習の流れ

- ①(日常・導入)ユニセフ募金が始まっている。困っている人のために募金はした方がいいと思っている。
- ②(学習課題設定)「国際協力をするときにはどんなことが大切なのだろう。」という課題を設定する。
- ③(資料を読む)「この空の下で」を読み、ハイチでの支援を話題に支援をするときに大切なことを考える。
- ④(終末・日常)自分たちにできる気持ちを贈る支援を続けようという気持ちをもつ。

この時限のねらい

国際社会に生きる一員である日本人としての自覚を深め、世界の平和と人類の幸せに寄与しようとする心情を培う。

2 子どもの学習の成果・反応

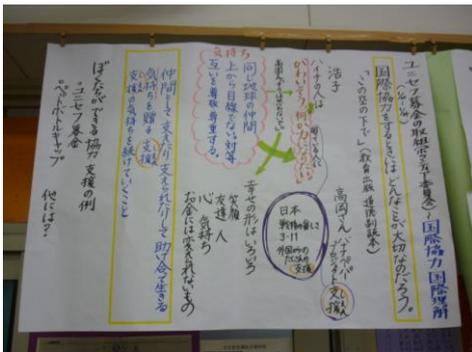
◇授業後の振り返り

「支援をするときに大切なのは同じ立場で接して、互いを尊敬し合うことだと思う」「豊かってお金や物だけじゃないということを改めて感じました。お金に換えられない物を大切にしていきたい」「他の国のことをよく知って協力することが大切だと思いました」「国際協力には相手の国を大切に思うことが大事」「どんな所に住んでいようとどんな環境であろうと一人ひとりが幸せであれば豊かなのだと思いました」

◇ちょうどボランティア委員会がユニセフ募金を行う週間だったのでそれをきっかけに授業を展開した。資料の登場人物「浩子」がハイチの人をかわいそう、力になりたいという、バナナペーパープロジェクト支援の高岡さんから、かわいそうと思わないでといわれる・・という内容の資料である。こちらがねらった以上に子ども達はよく考え、意見を交流でき、一人ひとりがその子なりに国際協力について自分事として考えられた。授業の中で日本もかつて戦後の復興期に各国から支援を受けていたことや、3・11の時にたくさんの国から支援を受けていたことも知らせ、子どもたちは各国が地球に存在する支え支えられる仲間であることを感じていた。

3 使用した教材

<教材>「この空の下で」 小学どうとく「心つないで5」(教育出版)



12 時限め「梅林なるほどザ・ワールドなう～タンザニアって行ってみたらこんな所だった！」——●

1 子どもの活動の流れ

- ①タンザニア研修のパワーポイントを見ながら、○×クイズの答えを知る。
- ②クイズに出てきたタンザニアは、タンザニアの中のほんの一部であることを確認し、ハンガーマップを見て、タンザニアは飢餓率が高い開発途上国という側面もあることを知る。

この時限のねらい

タンザニア研修の写真で○×クイズの答えを知り、自分たちの先入観や偏見の存在に気付くとともに、タンザニアの実際を知ることでタンザニアに親しみを感じさせる。

2 子どもの活動の成果・反応

◇この授業はタンザニアで手に入れた民族衣装を着て行った。それだけで子どもたちはアフリカの雰囲気を感じていた。子どもたちのタンザニアのイメージの中に、ビルや車、携帯電話やインターネットという物はあまり無かったので、実際のダルエスサラームの町並みや携帯電話、豊富な商品に溢れる様子に驚いていた。都会的な一面が存在する一方、自然も豊富なタンザニア、そして多くの支援を受けている開発途

上の側面などは概ね子どもたちの想像通りであった。さらに担任が見てくれたタンザニアはほんの一部であること、タンザニアは飢餓率が高い開発途上国であること、日本を始めたくさんの国から支援が行われていることをハンガーマップを示しながら話した。振り返りには、「とても幸せそうだった」「おいしそうなタンザニア料理が食べてみたい」「ハイチのように貧しくはないみたい」「道路にどうぶつがいてビックリした」「スーパーや車など日本と共通点があるんだなと思った」「わたしが思っていたタンザニアとまったくちがっていた」「子どもたちが笑っていて平和なんだなと思った。」「びっくりすることばかりだった」等子どもたちに先入観や偏見について気付かせることができたように感じる。



3 使用した教材

<教材1>ハンガーマップ国連WFO

13 時限目「日本の支援を考えよう～無人島ゲームでBHNを学ぶ～」(略)

14 時限目「5年1組のみなさんへ(国際理解)道徳」

1 子どもの学習・思考の流れ

- ①(日常)世界には満身に食事できない人もいるらしい。世界に目を向けることが必要だ。
- ②(導入)先生の感じたタンザニアの素敵なところは・・・では日本の素敵どころって・・・どこだろう。
- ③(学習課題)日本人として日本の良さを受け継ぎ伝えていくためには、今の自分にどんな考え方、行動を付け加えればいだろう。
- ④(展開)・タンザニアで出会った柿崎さん、20年以上タンザニアに住んでいる、その理由を想像してみる。
 - ・日本の良さとは何かを考えながら資料を読んでもみる。
 - ・資料から分かる日本の良さとは何か考える。
 - ・日本の、日本人の良さを意識して生活していたか振り返る。
 - ・日本の良さを大切にしてきた人たちの思いを受け継いで、自分が思う日本の良さを伝えていこうという考え方をすることが大切。
- ⑤(終末)日本人らしさを受け継ぎ伝えていこうな自分だろうか。どんな行動をしていけばよいだろう。

この時限のねらい

タンザニア支援のため現地で活躍する人たちの存在を知ることで、国際協力の実際を感じ、自分も日本人として協力していこうとする心情を育てる。

2 子どもの学習の成果・反応

◇資料にあるタンザニアで働く「侍」達に象徴される日本人の良さについて、「親切」「礼儀正しい」「責任感」「技術の高さ」「助けてあげたいと思う気持ちの優しさ」「難しい支援にも取り組むところ」「他国を尊敬する気持ち」「平和」など自分なりに考え友達と意見を交流していた。海外で働く「侍」達始め、今までの日本人

が受け継いで伝えてきたそれらの良さを意識しなかったら、僕達の時代で、良さは途切れてしまう。それではいけない。僕たちには日本の良さを受け継ぎ、次へ伝える責任がある、と力強く話していた。そのためにも日常生活で、挨拶をきちんとすること、身の回りにいる困っている人を助ける、一度引き受けたらやり遂げる、他国に対する思いやりを忘れない、みんなで協力することなど日本人らしさを受け継いでいくことを意識し行動したいと考えていた。

◇担任が期待した以上に、真剣に感じ、考え、意見を述べる熱い授業になったのは、資料に出てくるタンザニアで活躍している「侍」達の存在であろう。今回のタンザニア訪問で一番心に残り、子どもたちに伝えたいと考えたのが、タンザニアで尽力する日本の英知、「侍」の存在、そして日本らしい支援「O&OD」プロジェクトであった。しかし前述のように、全員が世界に、タンザニアに興味関心をもっているわけではなく、発達段階的にも学級の思考がタンザニアについては是非もっと知りたいというベクトルでもない実態があり、そこへJICAタンザニアのみなさんの事やO&ODについて語ったところで、担任の自己満足でしかなく、子どもの心にはあまり残らないのではないかと考えた。どうやって伝えたらよいか考えたあげく、道徳の授業においてねらいではなく、ねらいを捉えさせる一つの手がかりとして資料に登場させることで、押しつけがましくなく子ども達に伝えたいことが伝わるのではないかと考えた。授業の中で主役である「ねらい」ではなく脇役といえる「資料」でざらりと伝えましたが、結果よかったように思う。授業の振り返りでは「日本らしさについて改めて感心できた。タンザニアのために働いている「侍」の人たちは、親切な日本人らしさが出ていて、すごく尊敬したいと思った」「日本はすごい国！タンザニアも！すごくそう思いました。日本人はタンザニアのために・・・時にはタンザニア人は日本のために・・・それに侍さんはすごい。力を尽くしてがんばっていて。わたしも将来そんな人になってみたいです」「みんなと協力して今苦しんでいる人を助けなきゃ。日本の良さを受け継いでいけないと思う」「遠くの国で人のために、国のために、活動している「侍」さん達は偉大だとおもいました」「親切な人が日本にはたくさんいる。タンザニアのO&ODの支援も親切な日本だから引き受けたのだと思いました」等伝えられたことを捉えてくれている様子がうかがえ大変うれしく感じた。

③ 使用した教材

＜教材1＞「5年1組のみなさんへ」(自作資料より抜粋)

・

・・・日本はタンザニアに たくさんの支援をしています。道路を作ったり、米作りのための水を引いたり、電気が使えるようにしたり。タンザニアの人々が私たちのようにふつうにあたりまえだと思っている生活ができるように、また、少しでも快適な生活をおくれるようにとたくさんの支援をしています。また、そんな支援は、日本だけじゃなく他のたくさんの国々がタンザニアの国の発展のために力を貸していました。そんな支援のなかの一つ、「O&OD」という支援について話します。「O&OD」とは村人たちが、自分たちの村のために、どうすれば村がよくなるか話し合い、まず何をすべきか決め、みんなで協力して行動する・・・。そんなやる気のある村を作ろうという取組です。今までのタンザニア人は、外国からの支援や、政府からやってもらうことだけを待ち、自ら行動しようとはしませんでした。国土が広く、お金がそれほどあるわけではないタンザニアが発展していくには、それぞれの村が、それぞれにがんばって行くことが必要です。でもタンザニアの村人は、どうすれば村がよくなっていくか、その方法が分からなかったのです。そこでタンザニア政府は「O&OD」という取組をスタートし、村人が力を合わせて自分の村をよくしていく仕組みや方法を広げようとし、その支援を日本に求めました。

さあ、この支援、簡単だと思いますか？村々が自分たちで自分の村をよくしようという気持ちにさせる・・・という支援。道路を作ったり、水道を引いたり、電線を引いたりする「物を作る」支援とは全く別の支援。人をつくり、村を作り、国を造るという支援です。これには、とても時間がかかり、結果が簡単に目に見えるわけではなく、大変難しい支援と言えます。そんな手間と時間だけが膨大にかかる支援を果たして日本は請け負うのでしょうか？日本はどうしたでしょう。実は、日本はタンザニア政府からの申し出を引き受けました。それは、どんなに困難が伴おうとも、道路や水道や電気などの「物」を作ること以上に、「人」を作る「O&OD」はタンザニアが発展するには必要な支援だと考えたからでしょう。他の国だったら、きっと断っていたでしょう。でも日本は了承したのです。・・・

■ 全体を通して

1 研修をふりかえって

開発教育初心者であった自分が、事前研修で開発教育の意義や可能性を学び、実際のタンザニアでの研修では、一般の旅行では経験できないような貴重な経験をたくさんさせていただいた。タンザニアという国を通して学んだことは数知れず、また開発教育の視点をもつ大切さを実感できたことはこれからの私の教育活動にとって大変有意義なことであり大きな財産を得たと感じている。

事前研修では日本の支援の考え方、支援の規模等支援の実際を教わり、その具体的一例としてタンザニアのO&ODの取組について深くに学び、現地でその様子を目の当たりにした。私にとってこの研修はタンザニアの国の現状を学ぶと共に日本の支援の素晴らしさ、支援に携わる方々の思い、もつと言えれば日本の、日本人の素晴らしさを再認する研修となった。

学校現場でその研修の成果を子どもたちに還元する時、研修に参加した者の多くが感じることなのだが、小学生の発達段階を考えるといきなり「支援」という内容は難しく、学習のねらいを定めにくい。系統立った指導計画が学年毎に整備・設定されていれば、先の学年で「支援」を学習することを見越して現学年での学習を計画できるが、開発教育の教育課程がない現状では先の学習は保証されないののでつい難しい内容でも今学ばせたいと欲をだしてしまう。結果子どもの思考や思いにそぐわない、教師の自己満足のような授業になってしまうことがありがちだ。国際理解教育、あるいは外国語教育の内容として開発教育の内容を位置づけられるといい。現代そして未来を生きていく今の子どもたちにとって開発教育の考え方を学ぶことは大変必要なことだと強く感じるからだ。

繰り返しになるが、世界のグローバル化が急速に進む中、開発教育は児童にとって学ぶべき内容であることは間違いない。今回研修の機会を与えていただき、タンザニアでまた日本で出会ったたくさんの開発に携わる方々の思いを知ったことで、少しでもそれを多くの児童に知らせ考えさせ行動させる等開発教育を推進し続けることが、教師という立場の私ができる「支援」「開発」であると考えている。



写真 無人島ゲームをする子どもたち
授業で使用した白地図
道徳授業 板書
タンザニア〇×ゲームをする子どもたち

2 参考文献・資料

- 1) 「世界がもし100人の村だったら」(池田香代子 編)